

初恋ノオト。

M i u 3 T o m o a k i

綾瀬麻結

Mayu Ayase

termity



エタニティ文庫

目次

初恋ノオト。

5

書き下ろし番外編

オトナにだって秘密がある

343

初恋ノオト。

中高一貫校の私立相藍学院^{あいらえん}。中学と高校の校舎を結ぶ渡り廊下の脇には、桜の大木がある。その周りには青々とした芝生が広がっており、学生たちの憩^{やすみ}いの場となっていた。春風に乗って桜の花びらが舞うこの季節には、あちらこちらで幸せそうなカップルの姿が目に入る。

付き合い始めてまだ一年にも満たない、中学三年の藤田美羽^{ふじたみう}と高校三年の政木智章^{まさきともあき}。彼らもきつとそんな一組に見えるだろう。

でも実際は違った。先ほど政木から打ち明けられた話のせいで、二人の間には不穏^{ふおん}な空気が漂^{たな}っていたからだ。

美羽の顔は血の氣を失っていた。それでもなんとか氣力を振り絞り、美羽は彼のブレザーの袖を掴む。そして、そつと度の強い眼鏡をかける彼の瞳を覗^{のぞ}き込んだ。

「政木先輩。今……、あの……なんて言ったの？」

「……美羽、ごめん。僕は……父の転勤で神戸へ引越すことになったんだ」

聞き間違いではなかった。彼が遠くへ行ってしまふ。

「どうしても行かなきゃダメ？ こっちに残れないの？ 政木先輩、今年受験なのに！」

美羽は彼のブレザーの袖をさらに強く掴んですがりつく。必死な美羽に対し、政木はいつもと変わらない物柔らかな態度で、ただ静かな目を向けている。

「……政木先輩！」

政木の心を動かしたくて、美羽は声を張り上げた。

彼に出会うまで、恋なんて知らなかった。

小学生の時に気になる子はいたが、それは恋と呼べるようなものではなく、仲のいい友達どまり。中学生になっても男子に興味は湧かず、女子だけで騒ぐ方が楽しかった。

でも昨年^{さくねん}の十月。高等部の政木に告白されて、美羽の生活が一変する。

彼はあまり口数が多い方ではないので大人しそうに見えるが、表情を緩めるととても可愛いと、中等部の女子にも人気が高かった。そんな人からの、突然の告白。正直、どうしてわたしなの？と困惑したが、彼の優しい眼差し^{まなざし}に胸がときめき、美羽は告白を自然と受け入れていた。

いつの間にも好きになったのだろう。

美羽は、政木の顔を脳裏^{のうり}に焼き付けようとじっと見つめる。

柔和^{なごわ}な瞳、筋の通った鼻梁^{びりょう}、笑みをたたえる口元、そして美羽を惹きつけてやまな

い左目の下にある色っぽい泣きボクロ。

それがもう見られないかと思うと、胸が締め付けられる。たまらず彼に身を寄せたその時、名札の横に付けた小さな鈴が寂しげにチリンと音を立てる。政木と初めてデートした時に買ってもらったもので、それはいつも澄んだ音を響かせていた。なのに、今は鈍い音にしか聞こえない。まるでこの先の二人の暗い未来を暗示しているかのようだ。

美羽は恐る恐る政木の顔に手を伸ばす。そして初めて彼にキスをされた時と同じように、愛しさを込めて泣きボクロに触れた。

「離れたくない。イヤ……よ」

周囲からひやかすような口笛が聞こえる。いつもは恥ずかしさが先に立ち、すぐ身を引いていたが、今はそれよりも政木に自分の気持ちを伝える方が大事だった。

「美羽、ごめん。もう決まったことなんだ」

「イヤよ！ 政木先輩とさよならなんて……わたしっ！」

感情と共に勢いよくあふれ出た涙は、美羽の白い頬を伝い落ちていく。政木はそんな彼女の涙を、優しく拭^{ぬぐ}った。

「美羽、僕の話聞いて。今は両親と一緒に神戸へ行く。でもそれは、一年の辛抱だから」
「えっ？」

何も心配はいらないから、そんなに泣かないで——政木はそう続けながら、美羽の手

を握る。

「僕は関東の大学を受ける。だから、受かるまでの一年間我慢してくれないかな？ こっちに戻るその日まで、僕を待っていてほしい」

美羽はその言葉に目をぱちくりさせていたが、意味を理解するや否^{いな}や政木の方へ身を乗り出す。

「ほ、本当？ わたしたち、別れるんじゃないやなくて遠距離恋愛になるの？ 一年経ったら、

政木先輩は横浜へ戻ってきてくれるの!？」

「第一志望の大学は東京だけど、横浜に近いからすぐに会える。僕は必ず美羽のもとへ戻ってくるよ」

「じゃあ、わたし、我慢する。政木先輩を待ってる……」

美羽は周囲の視線などお構^{かま}いなしに、その場でむせび泣いた。何度も目を擦^{こす}るが、涙は一向に止まらない。

政木はそんな美羽の肩に片腕を回し、強く抱き寄せた。彼らしくない力強い抱擁に美羽の涙は瞬^{またた}く間に止まったが、戸惑い、軀^{からだ}の芯^{しん}に頑丈な針金が一本通ったようにガチガチに固まる。

「僕以外の男にふらふら目移りするんじゃないぞ。誰かに告白されても、彼氏がいるからって断らないと……怒るからな」

政木の軀からだがかすかに震えている。平静を装っていても、彼も美羽と同じように、いや、それ以上に葛藤かつらつしているということだろう。

辛い思いをしているのは、自分だけではない。

「わたし待ってる。待ってるからね……政木先輩」

美羽は約束を守ると何度も頷うなづき、心の中で「好き」と囁ささやいた。今口を開いたら、また泣き出して政木を困らせてしまいたいそうだったからだ。

制服越しに伝わる政木の体温を感じながら、静かに瞼まぶたを閉じる。彼から漂ただよう爽さわやかな匂い、美羽を抱くその力強さを脳裏のうりに刻むかのように、しばらくの間、彼に抱きついていた。

この時の美羽は、一年なんてあつという間に過ぎると思っていた。嫌いになって別れるわけではない。だから、彼を信じて待てばいいのだと。

でも、二人が離れ離れになってから半年も経たない、その年の九月。美羽の心はずたずたに切り裂かれる。あんなにも美羽を大切にしてくれた初恋の人、政木が急に心変わりしたと告げたからだった。

彼に振られたのは、美羽に落ち度があつたせいだから仕方ない。

何度も自分にそう言い聞かせてきたものの、心に負つた傷は癒いえることのないまま九年の歳月が過ぎた。

一

「ねえ、朱里あかりちゃん。あの……どうしてこんなところに来たの？」

白金台しろかねだいの閑静かんせいな住宅街の一角でタクシーから降りた直後、美羽は同期しもしょうの下條朱里の袖を引つ張ひった。

小正月が終わつたと同時に北から下りてきた寒波かんばの影響で今日は特に寒く、立つているだけで足元からどんどん冷えてくる。それでも理由を聞くまではこの場所を動かないと決意し、美羽は朱里に訴えた。

朱里との付き合いは、二年前、池袋にある旅行会社パシフィックトラベル・ジャパンに入社してからだ。新人研修で出会って仲良くなつてからはお互いのアパートを行き来したり、悩みを打ち明け合つたりしている。

だから、内気な美羽でも彼女の前でははつきりした態度を取ることができた。

「正直に言つてね、朱里ちゃん」

急に美羽を夕食に誘い、タクシーに乗ってまでここへ来たのには、当然特別な理由があるに決まっている。

意図を探ろうとする美羽の目つきにとうとう観念したのか、朱里はため息をつく。それから、嬉々として二枚のチケットを取り出し、その内の一枚を美羽に渡した。

「やっぱり、美羽には敵わないな。あのね、実は美羽と一緒にここへ来たかったの」

「何、これ。うん？ ……グレイスパーティ、……えっ!？」

美羽はチケットの一番下に書いてある単語を見て、思わず息を呑む。

「朱里ちゃん！ こ、これ……合コンって書いてあるよ!」

「うん。こういうところなら、美羽の恋のリハビリにもなるかなと思って」

朱里の言葉に、美羽は思わず顔をしかめた。未だに癒えない初恋の辛い記憶が甦り、胸が痛む。

そんな美羽の腕を、朱里は慰めるように撫でる。

「ごめんね。でも美羽には楽しい毎日を送ってほしいの。昔の男のせいで、今を台無しにしてほしくない」

美羽を傷つけるとわかっていてもそれを口にし、励ましてくれる朱里。心から美羽のことを思ってくれているのだ。

そんな朱里も、高校時代にあらぬ疑いをかけられたことが原因で心に闇を持っていた。モデルのようにどんどん綺麗になっていく彼女に、嫉妬する人がいたのだろう。親友の彼氏を寝取ったという噂を流され、誰も朱里のことを信用してくれなくなった。孤立す

るようになった彼女は、以来、人との間に壁を作るようになったのだ。

最初は美羽も、誰も寄せつけない朱里の雰囲気戸惑ったが、次第に彼女の心根の優しさがわかるようになった。だから他の人にも彼女の良さをわかってもらいたいし、彼女にも自分を卑下しなくてもいいと吹っ切ってほしい。

美羽はそんな思いを込めて、朱里の手を強く握る。

「それはわたしも同じ気持ちだよ！ 朱里ちゃんにだって幸せになる権利はあるんだから。わたしに心を開いてくれたように、他の人とも打ち解けてほしいって思ってる」

美羽と朱里はお互いの顔を見ると、ぶっと噴き出した。

「それじゃ、一緒にリハビリしようか。ここでね」

朱里はそう言ってチケットをひらひらと振り、目の前の建物をそれで指す。

「まあ、リハビリは別として、チケット代のもとには取らなきゃね。どうせならいっぱい飲んで、いっぱい美味しいものを食べよう！ ……とここで」

美羽は朱里に擦り寄り、チケット代がいくらだったか恐る恐る訊ねる。すると、驚きの値段を告げられた。

「そんな……。わたしのひと月分の交際費だよ!」

そんな美羽を見て、朱里は心から楽しそうに笑う。

男性に媚びていると思われたくないという気持ちから、朱里は会社ではあまり笑わな

い。その彼女の笑顔を見てみると、美羽の心も弾んできた。

「ねえ、お腹がすいたから早く入ろう」

美羽は朱里の腕を引いて、パーティ会場であるコンクリート造りの建物に入った。受付でチケットを渡し、小さなバッグに貴重品を入れ替えてクロークに荷物を預ける。

「どうぞごゆっくりお楽しみくださいませ」

執事風の格好をした男性スタッフが、目の前にある大きなドアを押し開いた。

「うわっ、すごい！」

目に飛び込んできた光景に、美羽は感嘆の声を上げた。外から見た時は無機質な外観の三階建てのビルだと思っていたが、一歩足を踏み入れた途端、それが間違いだったと気付かされる。

そこはまるで別世界のようだった。宮殿のような豪華な内装と、外からではわからなかった奥行きの深さ。ガーデンパーティができそうな中庭の中央にはライトアップされたプールがある。

美羽は視線を上げ、そこで初めて吹き抜けの中庭をぐるりと囲むように建物が建っていることに気付いた。しかも、二階、三階には中庭を眺められるような大きなベランダがいくつも造られている。

まるで、豪華な舞踏会の広間と高級リゾート地にあるヴィラを融合させたような建物

だった。

目を丸くしながら周囲を見回す美羽の隣で、朱里が説明してくれる。

「ここはね、プライベートパーティを楽しめる貸し切り邸宅なの。芸能人や著名人もエディングパーティを開くぐらいだから豪華だとは思っていたけど……まさかここまですごいなんて」

朱里の言葉に頷きながら、美羽は自分たちの周りにいる男女のカップルたちをしげしげと見る。

「パーティが始まって一時間経ってるのよ。もうカップルができてても不思議じゃないんだから、そんな風にじろじろ見ないの。ほらっ、向こうでシャンパンを飲めるみたいよ。行ってみよう」

「う、うん」

朱里にせき立てられるままミニバーへ行き、細長いシャンパングラスを手にする。それに口をつけながらそっと振り返ると、やはりカップルに自然と目が吸い寄せられた。

スーツを着た男性とドレスアップした女性は、きつと意気投合したのだろう。携帯を取り出して赤外線通信をしているようだ。そんな彼らを見てるとつい考えてしまう。

もし政木に嫌われていなければ、自分たちもあんな風に素敵なカップルになれていただろうか。

「美羽……、もう忘れよう。いきなり別れを切り出した元カレをずっと想うことはないんだから」

「うん、わかっている。でもね、考えずにはいられないの。わたしはいつたい何をしてしまったんだらうって。それが今もわからないから、出会いがあっても、最後にはこの人にも嫌われるかもって考えてしまつて……」

美羽は肩をすくめ、心配しないでと伝えるように朱里に微笑む。その時だった。

「あの、すみません。もし良かったら僕と話しませんか？」

急に声をかけられて、美羽と朱里は同時に振り返つた。そこには、髪の高い、黒縁のファッション眼鏡をした男性が立っていた。彼は朱里だけを熱心に見つめている。

「君が入ってきたのを見た時から、話をしてみたくて……」

「友達も一緒にいいかしら？」

朱里の言葉に、美羽は慌てて頭を大きく振つた。

「いいの！ わたしのことは気にしないで」

その男性は美羽が断るのを聞いて明らかにホッとした表情になる。

この人、ちょっと露骨すぎるかも——そう思いながら苦笑し、朱里に視線を移した。

「せっかく来たんだから、朱里ちゃん、楽しんで」

「あっ、美羽！」

朱里は何か言いたそうにするが、美羽は大丈夫と目で伝えて、その場所から離れた。

中庭のプールに近づいたところで一度立ち止まり、無表情の朱里を眺める。

遠目から見てもわかるぐらい、本当に朱里は美人だ。会社にいる時と同じように物静かにしているが、それがまた彼女の凛とした美しさを際立たせている。傍にいる男性も彼女に魅了され、あの手この手で興味を惹こうとしている。

それに引き替え、美羽は誰にも声をかけられない。

モデルのようにスタイル抜群で美人の朱里に対し、美羽は身長一五七センチほどで童顔ときている。同い年なのに、一緒にバーへ入つても美羽だけ身分証の提示を求められるのは、きつと落ち着きがないせいだろう。二十四歳にもなつて情けない。

わかっているのに、失敗しないよう心掛けるほど次々にミスを犯してしまう。

ため息をつきながら歩き出したまさにその時、夜露で濡れた冬芝にブーツのヒールが滑つた。

「あっ！」

なんとか立て直そうとするが、バランスを崩して膝をついてしまう。その拍子に手から離れたグラスが、綺麗な放物線を描いてプールにぽちゃんとお沈んだ。

他の客のグラスという笑い声が耳に届き、美羽の顔は羞恥に染まった。

誰とも目を合わせないようずっと下を向きながら、近くの建物に入る。そのままグラ

ンドピアノが置いてある部屋を通り過ぎ、二階へ続く階段を上がる途中の踊り場ようやく立ち止まった。

美羽は恐る恐る膝を見下ろす。黒のタイツが少し濡れているが、破れてはいないし、目立った汚れもついていない。

「良かった、つてこともないのかな」

どうしてこういつも失敗するのだろう。昔から変わらないおっちょこちよいな自分に呆れてしまう。

美羽はバッグからハンカチを取り出し、膝にあてて水分を拭^{ぬぐ}うが、その手をふと止めた。もしかしたら、政木は美羽のこの落ち着きのない性格に嫌気が差して、別れを切り出した？ だから彼は直接話すのも嫌になり、母親を通して好きな人ができたと告げてきたのだろうか。

多分、それが正しい答えなのだろう。政木と電話で話す時はいつも失敗しないよう緊張していたので、彼の声から伝わるちよつとした苛^{いらだ}立ちに気付かなかつたとしか考えられない。

こんな自分が、新しい恋に踏み出せるはずない。

「そんな風に考えちゃダメ！」

そう口に出しても、やはり恋愛に対しての不安が込み上げてくる。

初恋を忘れられないのは、振られた時の悲しい気持ちだけが心の奥にずっと残っていて、そこで恋の針を止めてしまったからだ。それを動かすには、過去を振り切つて前に進むしかない。

美羽は頭を垂れながら、少し濡れたハンカチをバッグにしまった。

しばらくその場でじっとしていると、動悸^{どうき}が徐々に落ち着き、膝の痛みも薄れていく。それでもまだ痛むのは、……初恋で負った心の傷だけ。

自嘲するように小さく笑つたものの、美羽はすぐに表情を改めた。ゆっくりできる場所を探すため二階へ上がり、豪華な調度品に目を見張りながら周囲を見回す。ここにもソファに座つて談笑する人たちや、暖炉の傍で寄りそうカップルがたくさんいる。

彼らを眺めながら、美羽はふと視線を部屋の奥に向けた。ウェディングパーティの際に新婦の控え室としても使えるベッドルームだろうか。豪華で繊細なレースがふんだんに使われている天蓋^{てんがい}を見て、自然と幸せな気分が湧き起こる。だが、そこで身を寄せていちやいちゃしているカップルに気付く、美羽は慌てて顔を背けた。

二十四歳になった今でも付き合った男性は政木ただ一人で、男性経験はない。欲望^{たぐよ}を漂^{たぐよ}わせた露骨な目つきや触れ合いを見ると、こちらが恥ずかしくなってしまう。

大人の女性として落ち着きがないのは、未経験なのと関係があるのかもしれない。もしかして誰かと軀^{からだ}の関係を結べば、心も軀も成熟して歳相応に見られるのだろうか。

「なくんてね」

好きでもなんでもない、見知らぬ人との初体験を考えるなんてどうかしてる。初めて好きな人と決めているのに、愚かなことを考えてしまった。

だけど、好きな人という言葉だけで、政木を思い出すという堂々巡りに陥る。

どうすれば政木を忘れられるのだろう。実家に保管してある、思い出の品々を処分すればいい？ 初めてのデートで政木と手をつないだ時にドキドキしたことや、初めてキスをされた時に嬉しいような恥ずかしいような気持ちになったこと。そんな甘酸っぱい気持ちがいっぱい詰まったあのノートも一緒に焼き捨てれば、新しい恋へ一歩踏み出せるのだろうか。

美羽は、込み上げてくるほろ苦い感情を吐き出すようにため息をつく。美羽が一人でも誰も気にする人はいない。なんだかむしゃくしゃしてやみくもに動き回りたい衝動に駆られた。

だが、そんな行動ができるはずもない。とりあえず気持ちを落ち着かせられる場所を探そうと引き続き視線を彷徨わせていると、中庭を見下ろせるベランダが目にとまった。どうやら誰もいない様子なので、そこならゆっくり自分の世界に閉じ籠もれるに違いない。

美羽は急ぎ足でそこへ向かった。ベランダまであと三メートル。

やっと一人になれる——そう思った時、冷たい風がいきなり吹き込み、薄いレースのカーテンを巻き上げた。

「……えっ?」

ベランダには一人の男性が佇んでいた。びっくりして、いつもより声が大きくなる。その声が耳に届いたのか、彼はベランダの手すりに肘を乗せたまま気怠そうに振り返った。

その瞬間、美羽はまるで雷に打たれたような衝撃を受けた。男性から凝視されるだけで、心臓が一気に早鐘を打ち始める。

一度も忘れたことのない、美羽に優しい眼差しを向けてくれたあの瞳がそこにある。

「ま、政木先輩!」

美羽の臉の裏に焼き付いている政木は、線の細い青年だった。今こちらを見ている男性はしっかりとした軀つきなので、当然似てるとは言いがたい。それでも、政木が年齢を重ねればこんな風になるのではと想像していた姿にそっくりだっただけに、美羽は目を逸らせなかった。

二

足が地面にくつついたかのように、固まってしまった美羽。

そんな彼女に、彼はいきなり男の色香漂う笑みを口元に浮かべ、手に持っていたグラスを軽く上げる。

女性を虜にするその仕草に、美羽は息を呑んだ。

「そんなところに突っ立ってないで、こっちへ来たら？」

自分に向けられた言葉なのかわからず、どきまぎしながら周囲を見回していると、男性はぶっと噴き出した。その拍子にグラスの中身が零れそうになったのか、彼は傍のテーブルにそれを置くと、再び美羽に視線を戻した。

「キミだよ、キミ。俺が話しかけてるのは。まあ、来たくないなら……別に来なくてもいいけど」

「行きます！」

美羽は深く考えもせず、そう答えていた。彼を見た時から胸がざわつき、心を激しく揺さぶられたからだ。

それが意味するものを確かめたいと思い、美羽は早歩きで彼のもとへ行こうとしたが、気だけが急いで足がもつれてしまった。さらにヒールが絨毯に引つ掛かり、美羽の軀は前方へ勢いよくつんのめる。

「きゃあ！」

ベランダの手すりに顔から衝突しそうになり、美羽は恐怖から目をギョツと瞑る。

ダメ、ぶつかる！

そう思った直後、美羽の軀は手すりではない何かにぶつかった。まともにもぶつかったにしては、顔や軀に走る痛みはそれほどでもない。美羽は恐る恐る目を開けた。

「おい、大丈夫か？」

目に飛び込んできたのは手触りのいいスーツ、ネクタイ、そして美羽の腕を強く掴むごつごつした大きな手。

えっ？ この形って——小指の第二関節だけが軽く曲がっているその手を見た瞬間、美羽の脳裏に中学生の時の思い出が甦る。

美羽が転びそうになるたびに助けてくれた、政木の手と同じ形だ。

「ま、政木……先輩！」

喉の奥で声を詰まらせながら面を上げた。だが、美羽の顔がたちまち強張る。

最初は、彼が政木なのではないかと思った。でも間近で見たら、政木とは顔が全然違っ

たのだ。

一番の違いは、政木の左目の下にあつた印象的な泣きボクロがないことだった。そして、政木は眼鏡をかけていたが、目の前にいる彼は眼鏡をかけていない。さらに注意深く顔を観察すれば、目の前の彼の方が少し鼻梁が曲がっている。

彼は、政木先輩じゃない！——目を見開く美羽の様子に、彼は徐々に笑みを引っ返め、しかめっ面になる。

「おい。俺を誰と間違えてる？ いや、違うな……。相手が見つからないから、そうやって誰かと間違えた振りをして、男に取り入ろうとしている。そういう魂胆か？」

「ち、違います！」

美羽は慌てて頭を振りながら、自分の軀を支えてくれていた男性の胸を押してその腕の中から抜け出した。

「わたし、昔からおっちょこちよいで、それですぐに思ったことを口に出しちゃったというか……」

身振り手振りを交えながら、美羽は無我夢中で自分の気持ち伝える。

「みたいだな。下でも見事にこけてたし。正直、あれは見物だったよ」

彼は楽しいことを思い出したように、肩を揺らして笑い出した。

「君の手からシャンパングラスが飛んだかと思つたら、綺麗に弧を描いて、見事プール

にぼちゃん。まるで漫画だよな」

「み、見ていたんですか!？」

美羽の頬は、恥ずかしさのあまりどんどん朱色に染まっっていく。

「当然。ここへ来てから、俺はずっと中庭が見渡せるこの場所を陣取っているからね。スタッフが、プールに落ちたグラスを確認したのも見たよ」

彼に言われて、初めて美羽はグラスを落としたとスタッフに話していないことに気付いた。何をやっているんだろうと天を仰ぎたくなる。その気持ちを抑えながらも、男性をそっと見上げると彼の目とぶつかった。

「それにしても、そのおっちょこちよいは直らないものなのか?」

「……そうみたい、です」

美羽はしゅんと俯き、軀を縮こまらせる。だがすぐ彼の反応を窺うように、そっと見上げた。長めのウルフカットに整えられたおしゃれな髪型に、モデル並みの高い身長、そして女性が思わず振り返るような精悍な顔立ち。女性に不自由にしていないというのは美羽の目から見てもわかる。

こういう自分に自信を持っている男性は、落ち着きのない童顔の美羽よりも、やっぱり恋人だと自慢できる美しい女性を好むのだろうか。

例えば、朱里のような人とか……

そんなことばかりが気になって仕方のない美羽の顔を、彼は無表情のままじっと見つめてくる。

ほんの一瞬、何かを堪えるように眉間に皺しわが寄るが、すぐにそれを打ち消して意味ありげに口角を上げた。そうかと思つたら、美羽を見るその瞳に蔑あざむみのようなものが宿る。どうしてそんな態度を取られるのかわからず、美羽が戸惑いを感じていると、彼はいきなり両手を上げて降参のポーズを取つた。

「参つた、そんな風に見るなよ」

彼は手を下ろしてペランダの手すりに肘を乗せると、優雅な仕草でもたれかかり美羽をじろじろと眺め始めた。

「そうだな。そそっかしきなんて、そう簡単に直るもんじゃないよな。子どものころの癖くせが抜けず、そのまま大人になるやつもいるし。記憶だつてそう。自分の心に深く刻まれたものは、なかなか忘れられない。そうだろ？」

「えっ？ ええ……」

男性は探りを入れるように美羽を見つめてくるが、いったい何を言いたいのかわからない。とりあえず美羽が頷くと、彼は甘い笑みを顔に張り付けた。

「良かった。俺たち、気が合いそうだな。じゃ、この辺で自己紹介でもする？ 俺は、蓮沼智章、二十七歳だ」

続けて、どんな漢字を書くのかまでわざわざ説明してくれる。それを聞いて、美羽は目をぱちくりさせた。

「えっ？ ……智章？」

「ともあき」という名前は珍しくはない。政木の親友も漢字違いの同名だったし、美羽の同級生には政木と全く同じ名前の人もいた。

だから、それほど気にすることではないのかもしれない。でも、一瞬でも政木だと勘違いしてしまった男性の名前が、政木と同じ名前前で同い年。そんな偶然が重なると、何かあるのではと勘ぐってしまう。

これつてもしかして、運命の出会い？ ……とか。

そう思った途端、美羽の胸の奥にほんわかとしたものが広がった。春の陽だまりにいろいろな柔らかな温もりが、徐々に美羽の緊張をほぐしていく。

「……わたしは藤田美羽、二十四歳です」

美羽はペランダの手すりに手を置き、微笑みながら智章を仰ぎ見る。彼は何故か、無表情のまま美羽をじっと見ていた。その瞳の奥に苦悶くもんのようなものが見え隠れしたが、すぐに薄らと笑う。

「へえ、まだ若いのに男を漁あさりに来たのか」

「違います！ 仕事終わりに友達から夕食に誘われて、内緒で連れて来られたのがこ

だったの。そこで初めて合コンみたいなパーティーだって知らされて……。ほら見て。わたしは他の女性のように、ドレスアップしてないでしょ？」

美羽は中庭にいる華やかな女性たちを指し、自分のローウエストの位置で切り替えが入った、起毛感たっぷりのカジュアルなワンピースに触れる。

「確かに。他の女たちと違って美羽にがつついていてる感はない、かな」

いきなり名前を呼び捨てにされて、美羽の背筋に甘い疼き^{いたみ}が走る。

ロマンティックに囁かれたわけではないのに、どうしてこんな反応が起きるのだろうか。

落ち着け、落ち着け……と自分に言い聞かせ、美羽は中庭を見下ろしながらビールを飲む智章の横顔をそっと盗み見た。彼は色めくカッパルを楽しそうに見物しているが、それでいてどこかあざ笑うように口元を歪^{ゆが}めている。

どうしてだろう。昔、恋愛で嫌な思いでもしたのだろうか。

「あの、蓮沼さんは」

「智章」

そう呼べよ——と言わんばかりに、智章は強い目力で美羽に無言の圧力をかけてくる。

「えっと、じゃ……智章、さん？」

「チッ。それで手を打つか。で、何？」

上目遣いで自分を窺^{うかが}う美羽に、智章は舌打ちしてしぶぶ承知する。

そんな尊大な態度を取る彼に美羽は苦笑するが、不快には思わなかった。美羽を惹^ひきつける何かは彼にはあり、もつと彼のことを知りたいと望んでしまふ。

どうしてこんなに強く惹かれるのだろう。

黙り込んだ美羽に気付いたのか、彼は続きを促^{うなが}すように片眉を上げる。美羽は我に返り、慌^{あわ}てて彼を見つめていたことを隠すように目を伏せた。

「えっと、智章さんはどうしてここに一人でいたの？ 他の女性と……その、性格が合わないかった？」

「俺？ 俺はツレに引っ張られて来ただけさ。そいつ、俺の引っ越し作業を手伝うためにこっちへ出てきてくれたんだけど、本当はこの有名なパーティーに参加したかっただけらしい」

こっち？ 転勤か何かで東京に引っ越してきたのだろうか。

小首を傾げる美羽の隣で、智章は顔を歪める。

「でも俺は別に女を必要としないから、ここで観察してたんだ。男は綺麗な花に群がると言うけど、女も上手く男の金の匂いを嗅ぎ分けてるなと思いがらね」

そこで言葉を切り、智章は美羽に視線を送る。

「美羽は、そういう部類に入らないみたいだな。それも当然か。俺と一緒に、騙されて

「ここへ来たみたいだし」

「あ、ありが……とう」

美羽は照れ隠しに微笑む。さらにそれを誤魔化そうとして、一人でべちゃくちやと話し出した。

今日一緒に来た同僚は、モデルのように背が高く美人なのに彼氏を作らないとか、見た目も中身も正反対な美羽にとても優しくしてくれるとか、それはもういろいろなことを。

智章は美羽のマシガントークを嫌がるどころか、穏やかな表情を浮かべている。それをいいことに訊かれてもいない話をし続けていると、彼がそっと美羽の腕に触れてきた。

予期しなかった接触に、美羽の軀がビクッと跳ねる。

「緊張したらずっとしゃべり続けるのも癖だろ。おっちょこちょいと一緒で」

「えっと、あの……」

まだ会って間もないのに、美羽の性格は智章にすっかりバレていた。そのことが恥ずかしくて目を泳がせるものの、これ以上とほけるのは無理だと観念し、おずおずと目上げる。

「昔からこうなの。わたしの成長は、学生時代で止まっているみたい」

「付き合ってた男のせいかな？」

政木先輩の？——そう口から出そうになった言葉を呑み込み、美羽はさりげなく中庭のカップルへ目を向けた。先ほどから何度か勘違いして政木の名前を呟き、智章の前で醜態を晒している。これ以上恥の上塗りをしたくない。

そう思っただけのもの、このまま彼の問いに無言を貫くのは良くないだろう。

「……そうかも」

美羽は静かにそう告げた。だが答えるまで少し間が空いてしまったからか、それとも美羽の返事なんて期待していなかったからか、智章は何も言わない。

しばらくその静寂に身を置いていたが、気まづくなってきたおむろに彼へ目を向けた。すると、智章は何か思い悩むように俯いている。その姿から哀愁みたいなものが滲み出ていると感ずるのは何故だろう。

何も言えずに横顔を見ていると、視線に気付いた彼が肩をすくめた。

「俺の人生も、もしかしたら高校三年の秋から止まってるのかもな。付き合っていたカノジョに捨てられたあの日から……」

智章の突然の告白に、美羽は息を呑んだ。

こんなに格好良く女性には不自由してなさそうに見える人が、学生時代とはいえ振られたなんて信じられない。

でも、彼が嘘を吐いているようには見えなかった。

智章の寂しそうな背中を見ているだけで、彼を慰めたい衝動に駆られる。美羽はとっさに手を伸ばし、手すりに乗せている彼の手にそっと触れた。

手のひらから伝わる温もり、自分の華奢な手と違う骨ばった大きな手。改めてそれを感じ取った瞬間、美羽は男性を拒み続けていた自分の心に、温かな光が燦々と降り注いでくるのを感じた。その光がどんどん膨れ上がるにつれて、胸の高鳴りも大きくなっていく。

智章のことをもっと知りたい。このままさよならしたくない。

心の底から湧き上がる正直な気持ちに、美羽は胸を震わせた。

政木に振られてから止まっていた心の時計。自分で止めたはずの恋の針が、自然に動き始める。チクタク、チクタクと頭の中で響くそれは心悸の音と重なり、どんどん胸の奥で大きくなってきた。

鬱積した思いを隠さない智章の瞳が、楽しげに細められるのを見たい。そして、その瞳を美羽だけに向けてほしい。

あふれてくる想いに突き動かされて、ゆっくり面を上げる。智章は自分の手に重ねられた美羽の手を怪訝な顔で見つめ、そしてその目を美羽に向けた。

ああ、落ちる……、恋に落ちる！

彼と視線が絡まった瞬間、美羽の軀の芯に燃えるような熱が生まれる。だが、美羽の思いと裏腹に、彼は皮肉っぽくフンと鼻を鳴らした。

「俺を慰めてるつもり？」

彼は美羽の手を振り払いはしなかったものの、冷たくあしらおうとしているのがわかる。いつもの美羽なら恐れをなして手を引つ込めていたが、勇気を出して彼の瞳を覗き込みながら伝える。

「わたしで、その……役に立てるなら」

途端、智章は目をつり上げた。

「そういう言い方はやめろ！もし男が、性的な意味だと勘違いしたらどうするんだ？簡単に股を開くって自分から言っているようなもんじゃないか！」

息巻く智章の顔つきに、美羽は内心震え上がったが、それでも彼から目を逸らさない。ほんの数十分前までは恋することを恐れていた美羽が、ここで智章と出会い、一瞬で彼に想いを寄せるようになったのも何かの運命。

これからどうなるかわからないが、この出会いは美羽にとってきつと人生の分岐点になる。だからこそ、このチャンスを逃したくなかった。

わたし、勇気を出して動いてみたい。彼と愛し合いたい！——強い想いを目に込める美羽に対し、智章は苛立ったように顔を歪める。

美羽がどういふ意味で、役に立ちたい」と言ったのか、智章は測りかねているのだろう。心の内を探るような険のある目つきに、ドキドキしながらもじっと耐える。それから十数秒経った時、彼の目の下の筋肉がピクピクと動いた。

その瞬間、美羽は断られるだろうと思つた。

「俺は、女に不自由してないんで」と口にする智章の台詞さえ聞こえてくる。それがあまりにも現実味を帯びていて、美羽は胸に驚掴みにされたような痛みを感じるほどだった。智章を見ていられなくなり、美羽は彼の手に重ねていた自分の手をゆっくり離した。すると智章はズボンのポケットから携帯を取り出すと、どこかへ電話をかけた。

「タクシーを一台。場所は白金台の——」

美羽がハツとして面を上げると智章の視線とぶつかった。電話をかけている最中も、通話が終わってから彼も彼は美羽を食い入るようにつめている。

強い目力に射抜かれて動けずにいると、彼はいきなり手を伸ばして美羽の手を掴んだ。「そういう意味、なんだろ？」

何故確認するような言い方を？ もしかして、本当に一夜を共にしたいと望んでいるのか、もう一度考える時間をくれているのだろうか。据え膳食わぬは男の恥の言葉通り、そのまま美羽を連れ出すこともできるのに。

こうやって相手を氣遣つてくれる智章の人柄に触れたことで、また彼への想いが強く

なる。

この先に何があつても絶対に後悔なんかしない！——美羽はそう誓い、智章を見つめ返した。

「……うん」

はつきりと口にした美羽に智章はゆっくり頷き、手をつないだまま歩き出した。ペランダを出て二階の広間を通り、階段を下りて中庭を突っ切る。

「美羽！」

突然名を呼ばれて、美羽は声の聞こえた方へ目をやった。グラランドピアノが置かれた部屋にいる朱里と目が合う。彼女は、美羽が男性に興味を抱いたり、親密そうに手を取ったりすることはないと知っている。だから、見知らぬ男性と手をつなぐ美羽の姿に驚いているのだろう。

美羽は安心してもらうために、大丈夫だからと声を出さず口を動かして気持ちを伝える。

一瞬、朱里はこちらへ駆け寄ろうとするが、すぐに動きを止め、笑みを浮かべて手を振った。恋愛に前向きになっている美羽の邪魔をしてはいけなさと考えたのだろう。

美羽は彼女に軽く頷くと前を向き、クロークへ続くドアを通った。ドアが二人の後ろで閉じると、煌々と照らされた明かりやクラシック音楽の音はたちまち消える。

夢のような華やかなパーティーから現実へ戻った瞬間だ。だが、美羽の気持ちは変わらない。クロークでコートとバッグを受け取ると、智章から差し出された手の上に自らの手を乗せ、肩を並べて一緒に外へ出る。そこにはすでに、タクシーが停車していた。

三

白と黒のモノトーンで統一された、シンプルなビジネスホテルの一室。

部屋に入るなり、智章は手慣れた様子で腕時計を外しベッドサイドに置くと、ネクタイの結び目に指を入れて緩めた。

そんな彼を見ているだけで、美羽の心臓は壊れるのではないかと思うほど、ばつくんばつくと鼓動を打つ。

「先にシャワー浴びる？ それとも一緒に入るか？」

「さ、さ、先に、あ、浴びてきます！」

緊張のあまり、美羽はどもってしまった。その自分の声にビックリして、バッグを足元に落としてしまう。その音に驚いた智章は、怪訝な面持ちで背後にいる美羽を振り返っ

た。

智章の目が何かを探るように細められた途端、美羽の口から心臓が飛び出すのではないかと思うほど神経が張り詰めた。緊張を隠そうとすればするほど、顔が強張る。

美羽は彼に何か訊かれる前に、バスルームへ逃げ込んだ。

「ど、どうしよう……！」

美羽は抑えきれない不安を口にする。

これは美羽自ら望んだことだと理解しているが、こういう場の独特な雰囲気慣れておらず平静を装えない。

未経験ということも影響しているだろうが、それを差し引いても美羽の態度はひどすぎる。扱いにくい女というレッテルを張られる前に、早くシャワーを浴びよう。

美羽は服を全て脱ぎ捨て、バスタブに入ってシャワーの栓を捻った。温かい湯の飛沫が、冷えた軀と張り詰めていた筋肉をほぐしてくれる。

少し落ち着いたところで、美羽はボディソープを手にして泡立て、軀の隅々まで丁寧に洗い始めた。

毎日同じことをしているのに、今日は肌が過敏に反応している。肌を伝う飛沫と泡のように、智章の指もそこをたどるかもしれない。そう思っただけで、美羽の軀は未知の経験への不安と期待に震えた。

シャワーを終え、タオルで軀を拭きながら、鏡に映る自分の姿を眺めた。高校生になつてから膨らんだDカップの乳房、贅肉のないウエストライン、そして黒い三角形の茂み。自分の全てを他人に見せることに、恥ずかしさが込み上げてくる。

美羽はバスタオルを軀に巻きつけると、服を手にしてバスルームのドアを開けた。室内の様子を窺うと、智章はシャツとズボン姿のままベッドに座り、何故か膝に肘をついて疲れたようにうな垂れていた。

「とも、あき……さん？」

美羽の声に我に返った智章は、すぐに立ち上がる。

「……俺も、汗流してくる」

そう言つて、智章はシャツのボタンを素早い手つきで外す。すると、彼の見事な胸筋と割れた腹筋が美羽の目に飛び込んできた。想像以上の男性的な肉体美にドキッとして視線を逸らすものの、彼の鎖骨から斜めに入った薄い傷痕が腋の裏に焼き付いて離れない。

昔、大きな事故にでも遭つたのだろうか。訊ねてみたいが、そこまで深く踏み込んでいいのかわからない。まだ親密とはいえない関係なので、今は口に出さない方がいいだろう。

そんなことを考えている美羽の横を、智章はサッと通り過ぎる。

バスルームのドアを閉める音、続いてシャワーの音が聞こえてきたところで美羽は肩からゆっくり力を抜いた。

美羽はホッと息をついてから手に持った服を綺麗にたたみ、椅子の上に置く。バッグも傍らに並べたところまでは良かったが、時間が経てば経つほど緊張は高まり、じっとしていられなくなってきた。

ベッドの周囲をうろろと歩き回っては立ち止まり、また歩き出す。そんな奇怪な行動を数回繰り返した時、美羽は足をぴたっと止めた。何故ならタオルを巻いた智章がそこに立ち、キツネにつままれたような面持ちで美羽を見ていたからだ。

「と、智章さん！」

「お前、いったい何やってるんだ？」

「えっと、その、初対面の男の人とホテルへ来るなんて初めてで……それで緊張して」美羽が言うのと、智章は口元を歪ませて鼻で笑う。

「ああ、付き合ってもいない男とホテルに入るのは初めてって？」

「ち、違つ……きゃー！」

いきなり智章に掴まれ、ベッドへ押し倒された。突然のことに固まってしまった美羽に、彼は吐息が混じり合うぐらい顔を寄せる。

間近で見る智章の妖しく煌めく黒い瞳や、柔らかかそうな唇から目が離せない。

「他の男とのセックスなんか思い出せないぐらい、俺が夢中にさせてやるよ」
 その艶めいた声は、美羽の肌を粟立たせるだけでなく、秘めた感情までも昂ぶらせる。
 何も言えないでいると、彼はゆっくり唇を重ねてきた。

「……っん！」

唇が触れた瞬間、心臓が高く飛び跳ね、同時に甘い声が鼻から抜ける。恥ずかしくなつて彼の胸を押し返そうとするが、手首を強く掴まれ、体重をかけられているので身動きできない。

智章の濡れた舌が遊ぶように唇に触れたと思ったたら、ぶつくりした下唇に歯を立てられた。

「唇を開けて」

なだめるように囁く智章の声音は、どんなに固い決意を持った女性の心をも簡単に溶かしてしまいそうなほど、危険な魅力を備えていた。美羽もその威力に抗えず、強く引き結んでいた唇から次第に力が抜けていく。智章は舌で美羽の口をゆっくり開かせ、彼女の内気なそれに絡ませる。

「……っふあ」

政木とした時とは全く違う、貪られるようなキスに、頭の芯がじんと痺れる。舌を突き込まれては口腔を舐められ、吸い上げられては舌を絡められ、何がなんだかわからない。

くなり気が遠くなりそうだった。

軀に巻きつけていたバスタオルは、キスの合間にいつしかはぎ取られていた。智章の手が直接美羽の肌を撫でる。露になった肩や鎖骨をたどり、乳房を下から包み込んで乳首を指の腹で擦る。

「あ……っ、はあ……ん」

「胸、でかいな。俺の手から零れるほどだ。しかも柔らかい」

智章は美羽の唇の上で囁き、乳房の形が変わるくらい強く揉みしだいた。さらに美羽の双脚の間に軀を割り込ませ、膝でそこを開かせながら内腿を撫でる。

愛撫はそれで終わらず、耳朶、首筋、鎖骨へとキスの雨を降らしては、美羽の知らない快感のツボを押し、未知の境地へ追い立てていく。

「やあ……っんあ、……とも、あき……っさん！」

「こんなにも敏感なんだな」

そう言うなり智章の手は下へ滑り、腰のラインから大腿を撫でる。そして誰にも触れさせたことのない秘所に彼の指が触れたその時だった。

「い、いや！ ダメッ！」

美羽は息を呑み、無意識に手を振り回して智章の手を払いのけようとした。だが彼に伸しかかられているせいで、簡単に動けない。

「何が嫌なんだよ。美羽のここ、蜜があふれてるっていうのに」

「あ、あの……」

覚悟していた。彼になら抱かれてもいいと思っていたのは事実。でも、ここにきて告白もせず抱かれることに戸惑いを感じていた。

彼を好きになつたと言わないまま続けたら、自分は軽い女だと思われるのでは？
そういう女性だと誤解されたくない一心で、美羽は激しく頭を振る。

「ああ、最初に、夢中にさせてやる」と言っておきながら、今まで抱かれた男たちと変わらないテクでつまらないって言いたいわけ？」

「ち、違っ！」

智章は美羽から軀からだを離すと、ベッドサイドに手を伸ばす。美羽の目に入ったそれは、彼がつけていたネクタイだった。

「知ってるか？ 視覚を奪われるとあらゆる神経が研ぎ澄まされていくんだ。不安でたまらないのに、触れられると……もうそれだけにしか集中できなくなる」

美羽に説明する彼の声は穏やかだ。でも、ネクタイを持ち美羽を見下ろす智章の瞳は笑っていないかった。カップルたちを鼻で笑い、ペランダから見下ろしていたあの瞳と似ている。

「と、智章さん、あの！」

なんとか想いを伝えようと試みるが、その前にネクタイで目を覆われてしまった。二重にされたのか、わずかな光さえ感じられない。

何も見えない恐怖にそれを外そうとするが、智章に手首を掴まれ制された。

「怖がらなくていい。俺は決して……美羽を傷つけないから」

わたしはそんなことを心配しているんじゃない。ただあなたに勘違いされたくないだけ——そう言おうとして口を開けるが、彼の唇で塞ふさがれる。

目が見えないせいで、智章の貪欲な口づけをよりエロティックに感じてしまい、先ほどよりもさらに欲望を煽あおられる。美羽の口腔に突き込まれた舌が、生々しく蠢うごめく。これから起こることを連想させるような動きだけで、頭の奥がじんと痺しびれて何も考えられなくなってきた。

智章の言うとおりだった。他のことを考えようとしても、肌を撫でる彼の感触、軀にかかる彼の重み、そして美羽をじわじわと侵す快感だけに意識が集中してしまう。

美羽は彼に触れられるたびに淫みだらに軀を捻ひねり、悩ましげな喘あはぎ声を上げる。

「っあん……はあ……っ」

智章は音を立てながら美羽の肌にキスを落としていく。そして熱い舌でそれらの場所を舐め上げ、また違う場所を攻めつては美羽を駆り立てる。そのキスが乳房へと移動するにつれて、彼の髪にさえ肌を愛撫あいぶされているように感じて、ぞくぞくと震えた。

「あっ……ダ、メ……っん！」

美羽の懇願を無視し、智章はこれを探していたと言わんばかりに、乳首を口に含み、巧みに舌で振動を送る。さらに、先ほど触れた秘所に手を伸ばし、愛液で濡れた蜜口に指を挿入してきた。

初めて入ってきた異物に美羽の軀は一瞬強張るが、ゆっくりと抽送を繰り返されると下股から力が抜けていく。そのうち、乳房を貪る彼の舌遣いとじわじわと襲いかかる膣奥の疼きだけに意識が向いてきた。

もう何がなんだかわからない。

「やあああ、っんあ、……っく」

「すごい濡れて、どんどん蜜があふれてくる。美羽は、こんなにもいやらしい姿を俺以外の男に見せていたんだな」

彼はいきなり抽送のリズムを速くした。ぐちゅぐちゅと淫靡な音を立てて膣壁を擦ってくる。

「いいっ……んっく、あー」

その強い刺激に、美羽の軀はビクンビクンと震えた。軀の芯に走る甘美な電流は美羽から正気を奪い、代わりに強い性感を残す。

「軀をくねらせ、甲高く喘ぐだけで俺の欲望を掻きまわすなんて。……クソッ！」

それはいきなりだった。気付けば美羽の双脚は大きく押し開かれ、指とは違うものが蜜口にあてがわれたと思った時には、大きくて硬い異物が膣壁を押し広げて侵入していた。

「や、やめて！」

美羽は手で彼を押しつけようとすると、智章は一気に腰を強く突き出した。

「いやああああ!!」

想像を絶する破瓜の痛みに、美羽は軀を硬直させて悲鳴を上げた。堪えようにも涙があとからあとからあふれ、彼にしがみつくと手はぶるぶると震える。

「ま、まさか……お前」

智章の手がこめかみに触れたと思った瞬間、美羽の瞼の裏に眩しい光が射す。目隠しされていたネクタイを取ってくれたようだ。ゆっくり目を開けると、信じられないと言いたげに目を剥く智章の眼差しとぶつかった。

「パーズンだったのか？ それならどうして……先に言わなかったんだよ！」

智章は慌てて美羽から身を離そうとするが、彼自身に膣壁を擦られて痛みに顔を歪める姿を見て、すぐに動きを止める。

「クソッ、……俺はなんてことを」

「ご、ごめん……なさい」

お願いだから嫌わないで、わたしを許して——想いを訴えるように智章を見るが、彼は何も言おうとしない。

このまま背を向けて部屋から出ていこうとでも考えているのだろうか。それとも、バージンの女とは関わり合いになりたくなかったと怒っているのだろうか。

結局のところ、智章に抱かれる前に想いをきちんと伝えなかったツケが、今自分に降りかかっている。それは理解していても、美羽はまずどう行動すればいいのかわからなかった。

きちんと想いを告げるのが先？ それともバージンだと最初に言わなかったことを謝る？ わからない……、わからない！

感情の昂ぶりを抑えられなかった美羽の目から、涙が零れた。すると、彼は驚愕したように目を見開いた。

「悪かった……」

明らかに戸惑った表情を浮かべる智章は、美羽に顔を寄せ目尻にキスを落とす。軀が近づいたせいで結合が深くなり、じんじんとする痛みがまたも走る。だが、美羽を慈しむような彼の仕草に胸が熱くなって何も言えなかった。

しばらくそのまましていると、膣の痛みが徐々に薄れ、異物に膣を押し広げられている違和感だけになる。

「そろそろ動いても、大丈夫か？」

「うん……」

「抜くぞ」

そっと彼の顔を見て美羽は息を呑んだ。彼はとても苦しそうに顔を歪め、その額に薄らと汗を滲ませていたからだ。

「……くっ」

智章はうめきながらゆっくり軀を離すと、脱力して美羽の隣に横たわった。彼は片腕を上げて目を覆い、息を弾ませている。全力疾走をしたあとのように激しく上下する胸板を見て、彼は体調が悪いのかと心配になる。

だがその一方で、引き締まった腹筋の下にある黒い茂みからそそり勃つ彼自身は、未だに漲っている。美羽の愛液で光るそれは赤黒く、ピクピクとしまっていた。しかも反り返り方の角度からして、彼の欲望は収まるどころかまだ昂ぶったままなのがある。

それを目にしただけで、緊張のあまり美羽の口の中はからからになった。

わたしは？ わたしはまだ智章さんに抱いてもらいたいの？ ——心の中で自分に問いかけてみると、その答えはすぐに出了。

もちろん、イエス！

「智章さん……」

美羽は勇気を出し、手を伸ばして彼の腕にそっと触れる。

「触るな！」

苛立った怒声にビククリして、美羽は慌てて手を引つ込めた。

「ご、ごめんなさい」

「違う、……そういう意味じゃない」

智章は億劫そうに息を吐き出してから、視界を遮っていた腕をゆっくり下ろす。

「男の燃え上がった性欲は、そう簡単に抑えられないんだよ。今、美羽に触れられたら……お前を最後まで抱かずにいられなくなる。パージンのお前を」

真面目に言ったかと思ったら、彼はふっと笑い、手を伸ばして美羽の頬に触れた。

「悪い、美羽はもうパージンじゃないな」

美羽はそんなことは気にしていないと激しく頭を振り、抱いてほしいという願いを瞳に込める。

「確かに、わたしはパージンじゃなくなったけど、でもそれはわたしが望んだことなの。今も抱いてほしいって思ってる。智章さんがまだ求めてくれるなら、もう一度わたしを——」

最後まで言い終わらないうちに、智章に引き寄せられ唇を奪われた。情熱的なキスに加え、触れ合っている部分から感じる彼の激しい鼓動に、美羽の軀は一気に燃え上がっ

た。

「もう一度美羽を抱きたいかって？ 当然抱きたいに決まってるだろ！ ずっと……

ずっとこの腕に抱きたいと思っていたんだ」

これは美羽が智章と出会ってすぐ惹かれたように、彼もひと目で美羽に好意を抱いてくれたということ？

そう思うと軀中から喜びが湧き上がり、何も話せなくなる。じっと智章を見ていると、彼は鼻で美羽の頬を誘惑するように撫でる。

「痛みを帳消しにするくらい快感を与えてやる」

智章は小さな声で囁くと、美羽をベッドに押し倒した。視界がぐるっと回って目をぱちくりさせる美羽の横で、彼は背を向けて下を見ながら手を動かしている。

「何をして……？」

少し軀を起こすと、ベッドの上に置かれた破けた四角い包み紙が美羽の目に入った。

もしかして、あれがコンドーム？ ——今更だが妙に生々しさを感じ、美羽は恥ずかしくなって軀を丸めて枕に顔を埋める。

「おい、顔を背けるなよ」

智章の言葉に、美羽はほんの少し身動きして上目遣いをした。

「なあ、そんな色っぽい顔で俺を見るな。めちゃくちやにしたくなるだろ」

「えっ?」

ピンク色に染まった頬、じっと智章を見つめる潤んだ瞳。それらが彼の欲望に火をつけたなんて、美羽は全く気付いていない。

「この天然の恐ろしさ……思い出した。でも今は、美羽を抱く方が先だ」

智章は覆いかぶさり、再び美羽の唇を求めてきた。貪るようなキスは何度も角度を変えて、正気に戻っていた美羽の理性をゆっくり溶かしていく。軀の隅々に手を這わす彼の愛撫や、口腔を蠢く生々しい舌の感触に軀が震えて、下腹部の奥が甘く痺れる。

「……っ、んあ、……やあ」

今度は、まるで生クリームを舐めるように、智章のねっとりした舌が美羽の軀を這う。そのたびに敏感に反応して、蕩けてしまいうさそうだ。

その手がやがて下へと移動し、濡れた黒い茂みを掻き分ける。彼は閉じた襞を押し開き、濡れた蜜口に指を挿入した。くちゆくちゅと音を立てながら膣内を掻き回し、時折壁を強く擦る。

「ダメ! ……そんな、あっ……軀が、おかしく……なっちゃう」

「もっとおかしくなればいい。快楽で蕩ける美羽を、俺に見せてくれ」

早鐘を打つ心音が耳の奥でうるさく響く。美羽の全てを食べつくすようなキスと愛撫に、頭がぼんやりとしてきた。

感じられるのは、軀を支配する甘美な快感のみ。

「もう、ダメ……。わたし、変に……あ……っ、っんあ!」

美羽は泣きそうになりながら、シートを強く握った。

「クソッ! お前、俺の理性を失わせるのが上手すぎる」

智章は美羽の双脚の間に割って入ると、膝の裏に手を入れて片足を抱えた。ぱっくりと開いた襞から覗く蜜口にいきり勃つ彼自身をあてがい、そのまま一気に貫く。

「ああ……っ!」

一瞬、またあの痛みに襲われると思った。でも今度は痛みよりも、膣壁を押し広げる異物の硬さや、狭い場所を無理やりこじ開けて突き進んでくる窮屈さの方が大きい。

「……痛いかな?」

美羽は、奥歯を噛み締めて頭を振る。

「ちよっとじんじんするけど……痛いって言うより、すぐきつくて……大きくて、息がしにくい」

正直に話しているだけなのに、何故か智章の頬がバラ色に染まる。

「おまつ。どうしてそう簡単に男を喜ばせることを言えるんだよ。……ああ、もうダメだ!」

そう言って、智章はゆっくり律動を始めた。引いては寄せる波動のように、大きくて

硬く漲った彼自身が一定のリズムを刻む。膾壁を擦られるたびに腰が甘く痺れ、その度に美羽は喘ぎを漏らした。

「美羽、……美羽」

胸に秘めた恋情を吐露するような彼のかすれ声に、美羽は胸がきゅんとなった。同時に、心臓を鷲掴みにされたような痛みを覚えて無性に泣きたくなる。

恋情を吐露？ ……違う、それは自分に向けられたものではなく、忘れられない元カノへの想いに違いない。

「……俺は、ずっと……この目を」

無意識なのか、智章はそんな独り言を呟く。

やっぱり彼は、自分を抱きながら……元カノへの想いをぶつけている！

身代わりとして抱かれることが、こんなにも辛いものだとは思わなかった。

それでも智章を拒もうとはせず、美羽は乱暴に彼の背に両腕を回して自分の方へ抱き寄せた。乳房が潰され、結合がさらに深くなって苦しいが、自分の想いだけは伝えたい。愛しさを込めて智章の背を撫で上げると、彼の軀が小刻みに震えた。

「頼むから……俺を煽るな。籠が外れてしまう」

智章は歯を食い縛って必死に何かを我慢しているようだったが、上手くいかなかったのだろう。舌打ちした直後、律動を速めてきた。

激しい動きに合わせて、めくるめく喜びが血流に乗って軀を支配していく。それが怖くて美羽はギョツと目を閉じたが、やはり頭の前からつま先まで駆け抜ける甘美な風には抗えない。

「あっ……ん、っ……はあ」

智章はぐちゅぐちゅと淫靡な愛液の音を立てて抽送し、膾壁を擦り上げてくる。

痛いほどの快感にたまらず軀を捻るが、それでも容赦なく突き上げられた。

「あっ、あっ……っんあ、もう……ダメッ！」

もう助けてほしかった。この身を支配する恍惚のうねりから。

美羽が泣きそうな声で喘ぎ続けていると、智章は荒い息遣いをしながら二人の間に手を滑らせ、ぷっくり膨らんだ蕾を指の腹で強く擦る。

「はあ、……っん、ああ……っ！」

その瞬間、美羽の軀の中で何かが爆発したのではないかと思うくらいの快感が弾けた。自分の悲鳴が遠くでこぼれているの聞きながら、一気に脱力した。

そんな美羽を、智章は何にも代えがたい宝であるように抱きしめた。腕に力を込められ、腰がさらに密着する。膾内に収まっている彼の昂ぶりは未だに芯を失わず、深く奥へと埋め込まれたままだ。

収縮を繰り返す膾に合わせて、彼のものがドクンドクンと脈打つ。その振動を意識し

てしまい、美羽は知らず知らず彼自身を締め付けていた。

「ちよつと、休憩させてくれ」

智章は笑いながらゆっくり軀を離し、コンドームの処理をする。それが終わると、自分の軀の上に美羽を引き寄せて掻き抱いた。

優しい仕草に胸が熱くなるが、そうされればされるほど泣きたくもなる。その意味を考えたくなかったが、自分の気持ちを誤魔化すことはできない。

わたしは、智章さんの元カノに嫉妬してる！——思わず口に出してしまいそうになるのをぐっと堪え、美羽は少し身を起こして彼を見つめた。

「どうした？」

智章の言葉に小さく頭を振りながら、彼の左目の下に手を伸ばす。政木には、そこに泣きボクロがあった。智章にボクロはないが、もうそんなことはどうでもいい。政木以外の男性に恋ができるか不安だったけれど、今の美羽の心を占めるのは優しく抱いてくれる智章のみ。

でも彼は？ 智章は美羽だけを見つめてくれている？

正直、そうは思えなかった。最初はもちろん美羽自身を見てくれただろう。だが、途中から智章は美羽に元カノを重ねて抱いているように感じたからだ。

「深く考えるな」

「えっ？」

智章は、自分の肩の窪みに美羽の顔を引き寄せる。

「とにかく、今は何も考えずに休むんだ。かなり自制したせい、俺も少し軀が辛い。美羽、あとでちゃんと話そう」

そう言つて、智章は静かに目を閉じた。美羽が彼の胸に抱かれたまましばらくじっとしていると、頭上から寝息が聞こえてきた。それを機に、ゆっくり彼から離れる。秘所にズキズキとした痛みが走り、美羽は思わず顔をしかめたが、その痛みを堪えてできるだけ素早く服を着る。

帰る準備が整ったところで、静かにベッドに眠る智章に目を向けた。彼は寝息を立てて、まだ気持ちよさそうに眠っている。

「……ごめんさい」

美羽は静かに謝った。智章は、あとで話そうと言つたのに、彼の話を聞かずこのまま逃げ出すことを選んだからだ。

臆病なのだろう。智章から、欲望と恋心は別で、美羽の気持ちは受け入れられないと言われるのが怖い。元カノを忘れられない、という言葉聞きたくない。だから、このまま彼と一緒にベッドでゆっくり休むなんてできなかった。

美羽はバッグの取っ手を掴み、ベッドに眠る智章に目をやった。もう一度間近で愛し

い人の顔を見たいという欲求から、自然とベッドへ行こうとしていることに気付き、慌てて踵を返す。

それがいけなかった。二つある取っ手のうち一方しか持っていなかったため、バッグの中身が飛び出し、勢いよく絨毯に散らばってしまった。

どうしてこんな時に限って、ミスをするのだろう。

「ん……」

智章のうめき声にギョツとして、美羽はとっさにしゃがみ込む。途端秘所に走る疼痛に声を出してしまったものの、彼が深い眠りから目覚める気配はなかった。

美羽は安堵からホツとするが、すぐに飛び散った荷物をバッグに入れると、振り返りもせず部屋から出ていった。

四

「それで逃げるように帰ってきたの？」

信じられないと言いたげな朱里に、美羽は椅子の上で軀を小さくして頷く。

智章に抱かれた金曜の夜。朱里から智章とパーティを抜けたあとの詳細が知りたいと

メールが届いていたが、すぐに話す気にはなれず、週明けに会社で話すと言ってそのままにしていた。

そして月曜日の今日。管理課に所属する美羽と朱里は、午前中から業務の一環である受付を担当する予定になっていた。朝礼が終わって受付に着くなり朱里に催促され、たった今、全て話し終えたところだった。

「どうして自分で相手の気持ちを決めつけるの？ あの人が美羽を元カノに見立てたかなんて、本人に訊かないとわからないのに」

「ごもっともです、はい」

「そんなことだから、社員証までなくすんだからね」

「ええっ？ ど、どうしてそのことを知ってるの!? あっ、犯人は瑞穂ちゃんね」

美羽は、今朝出社して初めて社員証を失くしたことに気付いた。偶然、エレベーターで一緒になった総務課の同期、佐藤瑞穂にその話をしたあと、美羽はすぐに人事課へ行き社員証の再発行手続きをした。その間に彼女は、美羽の失態を朱里に話してしまったのだろう。

「そう、瑞穂から聞いたの。で、社員証のID無効の手続きは無事終わったの？」

「人事課の人にちよっと嫌みを言われたけど大丈夫。新しい社員証は帰る前にはできてから、あとで取りにきてくれてって言われた」

美羽はポケットから仮の社員証を入れたカードホルダーを取り出し、朱里に見せてから首にかけろ。

「じゃ、そっちは解決。あとは、その人とのことだけね。連絡先の交換もしないければ、どこで働いているのかもわからないでしょ？」

「うん。知ってるのは彼の名前だけ」

どうして連絡先の交換をしなかったのかと訊ねられる前に、美羽は朱里から顔を逸らす。

そこまで頭が回らなかつたと話すこともできたが、自分がどれほど智章に心を奪われたのか打ち明けるのはまだ妙に気恥ずかしい。

そんな自分に呆れながら、美羽は誰もいない広い受付を見渡した。

旅行会社パシフィックトラベル・ジャパンは中規模の旅行会社で、池袋にあるオフィスの十階にある。大手旅行会社がツアープランを販売するのは違い、ここでは客の要望に沿ったオリジナルプランを提案している。そのため海外へ買い付けに行く実業家や、個人旅行を楽しむ富裕層、社員旅行を計画する会社が主な顧客となっていた。

顧客に自由に旅を選んで楽しんでもらうため、それを手助けする社員たちも堅苦しいイメージを与えないよう、男女共に制服はない。男性はスーツが多く、ラフすぎない格好を心掛けている。女性は、華美にならない程度の、露出を控えた服を着るようにして

いた。美羽や朱里が働いている管理課は受付も担当しているので、特に服装には気を付けている。

美羽は誤魔化すように、今着ているニットワンピースの袖についていた糸くずをつまんでゴミ箱へ入れたり、受付にある応接室の予約表に目をやったりする。だが、先ほだから朱里が何も言わないのが気になり、美羽は恐る恐る隣に目を向けた。

すると、それを待っていたかのように、朱里は優しく美羽の腕に触れてきた。

「もう一度、その人と会えたらいいね」

やっぱり朱里には何もかもバレてる。美羽は、降参とばかりに苦笑した。

「うん、そうだね。もし智章さんと再会できたら、それこそ運命かも」

そう答えながらも、美羽は簡単に彼と再会できるなんて思っていなかった。もし出会えたら、二人は運命の赤い糸でつながっていることになるのでは？ だが、そんな奇跡は滅多に起こるものではない。

美羽が小さくため息をついた時、受付の電話が鳴った。内線だと確認してから、朱里が受話器を取る。

「受付の下條です。……はい、応接室の予約ですね。午後は……」

美羽は先ほど見ていた予約表を朱里の前へ滑らせ、その間に備品の補充をしようと立ち上がった。そのタイミングで今度は美羽の前にある電話が鳴り、内線のランプが点滅

する。

「受付の藤田です」

『……チツ、下條さんじゃなかった』

愛想良く答えた途端、舌打ちに続いて残念そうな男性の声。

また彼ね——美羽は怒るところか口元を緩めて再び椅子に腰を下ろした。

「観光事業課トラベルプラン係の越智さん、ご用件はなんでしょうか？」

『あつ、やっぱり俺ってバレバレ？ それなら下條さんを出してよ。今日のAタイムは彼女が担当だつて知って、内線をかけたのに』

朱里のことが大好きだと公言する二十六歳の越智誠一の言葉に、美羽は笑みを零した。

管理課は他の課とは違い、九時から十三時までのAタイムと十三時から十七時までのPタイムという独特の区切りを設けている。受付の仕事は顧客を出迎えるだけでなく雑用も多いため、途中で集中力が切れないようシフト制になっていた。つまりAタイムに受付に座れば、Pタイムは管理課に戻ってテレフォンオペレーターをすることが決まっている。

社内にいるのは変わらないのに、朱里が受付にいる時を狙って内線をかけてくるのは何故か。

理由はただひとつ。管理課での仕事は基本オペレーターなので、内線は課長が取る。

立ち読みサンプルはここまで

だから朱里と直に話をしたいと望む男性社員は、彼女が受付に座るのを見計らい、我先にと内線をかけてくるのだ。もちろん、越智も朱里に想いを寄せる男性社員の一人だった。「残念でした。朱里ちゃんは今、応接室の予約を受けてます」

『うわ、本当タイムミングが悪いよな。あのさ、悪いんだけど会議室Cにコーヒーを八人分持つてきてくれないかな？』

「八人分ですね。わかりました」

『できれば、下條さんに持つてきてもらえると……』

「それはお約束できません。お茶運びの順番は、わたしたちの間で決めているので」

『……だよ。いつもそう言ってるもんね。それじゃ、コーヒーよろしく』

受話器を下ろすと、朱里が美羽の袖を引っ張る。

「誰？」

「越智さん。コーヒーを会議室に届けてくれて。朱里ちゃんを出せ出せってうるさいのなんの」

ニタニタする美羽に対して、朱里は無表情で「あつそ」と言うだけでそっけない。美羽の知る限り、こんな態度を取るの越智に対してだけだった。

そもそも、朱里は誰に対しても人当たりのいい態度で接するが、自分の心に踏み込まれないよう一線を画している。越智に対してもそうしていたのに、なんとかして朱里の